

動脈硬化の遺伝子

東大発見 がんの増殖も抑制

東京大学の永井良三教授と新藤隆行助手らは、

動脈硬化や心肥大、がんによる血管新生などに幅広く関係している遺伝子を発見した。薬剤で遺伝子の働きを抑えると、通常起きる動脈硬化などが発生しないことをマウスの実験で確認した。新治療法開発につながる成果という。

研究グループが発見した遺伝子は、両親から一つずつ受け継ぐ「KLF5」。米医学誌ネイチャ・メディシン最新号に

発表した。

動脈硬化は血管が傷つき修復する際に炎症が起きて血管の壁が厚くなり、内側が狭まり発症する。遺伝子操作で一方のKLF5しか働かないマウスを作ったところ、血管を傷つけても動脈硬化にならなかった。このマウスは、心肥大を起こす物質を注入してもほとんど変化がなかった。

がん細胞を移植したマウスは通常、細胞の周囲に栄養を供給するための血管が新しくできるが、

遺伝子操作したマウスは

血管がほとんど新生されず、がん細胞増殖が抑えられたという。KLF5が一つ働かなくても寿命に変化はないという。

研究グループは、白血病治療薬として実用化に向け臨床研究中の薬剤「Am80」が、KLF5の活性を抑えることも突き止めた。この薬剤を動脈硬化治療の際に血管に埋め込む金網(スプリント)に入れたり、手術の難しい重症の患者に投薬したりして治療につなげる。

会議 ほかフンド、エリアの代

八、のヨハれる持する世開発サ主要国が十七クで開った。らかに